

A vertical photograph of a dense forest in winter. The trees are mostly bare, with some snow on the ground and branches. The atmosphere is misty and grey. In the lower center, a small, dark silhouette of a person is walking away from the viewer. The text '北の果てへの巡礼' is overlaid on the right side of the image in a white, serif font.

北の果てへの巡礼

「ね、なぜ旅に出るの？」
「苦しいからさ。」

—— 太宰治『津軽』

一、ノルズホフ

ノルズホフは、三十年前もいまも、アイシクルエリア西端の突きでた半島の先にある、灰色の北の海に囲まれた陰鬱な町にすぎない。おもな産業は漁業と天然ガスの採掘だが、以前はかなりの利益をもたらした天然ガスも、近年は埋蔵量を考慮した計画的減産が続いており、といってほかにこれといった資源もなく、世界中によくある、貧しいというほどではないが退屈な田舎町のひとつだった。

三十年ほど前、アイシクルエリアの大規模な開発にともなって、町の南東にカジノつきホテルが建ちはじめた。かつては万年雪に覆われていたというアイシクル地方だが、ここ数百年は温暖化が進み、短い夏のあいだには、美しい緑の大地が顔を出すようになっていた。その夏のあいだに、大地は裸にされてならされ、ホテルにくわえてショッピングモールや高級クラブといった施設が次々にできた。ゴールドソーサーが賭け事というより総合アミューズメントパークを目指していたとすれば、こちらは世のギャンブル狂いどもを狂乱させる、真実のカジノの都になった。さっそく常連になったあるお客は云った……「ここに比べりゃあ、ゴールドソーサーのチョコボレースだの闘技場のなんてのは、赤ん坊のおしゃぶりみてえなもんよ」

ノルズホフでは、カジノの建設話が出たとき、案の定、賛成派と反対派にほぼ二分された。保守的で厳しい住民たちは、カジノという騒々しくいかかわしいものに露骨に顔をしかめた。一方、展望もなくぶらぶらと町で腐っている若者たちや、新しもの好き、商売人などは、なにかしらの転機やチャンスが来るのを期待してこの話に飛びついた。住民たちのさまざま意見をよくそにホテルの建設は着々と進み、やがて多くの住民たちは、カジノなどであろうと自分たちにはなんの

関係もないのだということに気がついた。カジノから車で片道二時間もかかるような辺鄙な町にわざわざやってくる観光客などいなかった。町の暮らしは少しも変化を被らなかつた。町を出てゆく若者は相変わらず出てゆき、結婚する若者は相変わらず結婚し、年寄りには相変わらず冬の寒さにやられ、やがてノルズホフはいつもの平静さと退屈さをとりもどした。

「もっと南に行つて、北コレルに行きやあな」

と、たとえばこのノルズホフにたまたま立ちよつた人間が、ガソリンの給油がてら、スタンドの経営者パールマーソン氏に話しかけようものならはじまるだろう。

「南行つて北コレルつても変な話だけどな。あすこはあのジェノバ戦役の英雄バレット・ウォーレスの故郷だからよ、いまじゃ村も炭鉱も当時のままの歴史的遺産つてわけよ。しけた村だけどな、なんにもなくて、納屋よりひでえ家が並んでるだけでよ。風が吹くと壊れちまうつてんで、風が来るたびになにかつちやあ修繕すんのよ。おかげで仕事があんだだけどな……それかアイシクルロッジにやりやあな。あすこから先は巡礼地だからよ、大空洞の……例の聖人だよ。セーファつったな。列聖されたろ、ジェノバ戦役四百年つってな。おれは難しいことはなんにもわかんねえけどよ、豪華な列聖式があつたつて。世界じゅうの聖職者があつまつてな。ありやちようどカジノができたあたりで……」

パールマーソン氏の話はいったんはじまつてしまふとなかなか終わらない。しばらくすると、しびれを切らした彼の奥方が、スタンドの横にある日用品や食料品を扱う店から出てきてなにか用事を云いつけるのである。

「ねえ、あんた、ストライフさんに頼まれてたの、ちゃんと届いたの？」

「ストライフさんなんぞ知るか」

「パルマーソン氏はなぜか急に機嫌が悪くなる。」

「あんなやつは待たしときやいいんだよ。いやね」

とパルマーソン氏は客に向きなおって云う。

「最近妙な男が越してきやがってね。まだ若い男なんだが、これがなんの商売してやがるんだか、でっけえバイク乗り回して、ときどき夜になるとどっか行っちゃまう。んで、帰ってくるってえと、決まって金持ってる、ってなもんで。連れの男がいるんだが、これもまた妙なやつでねえ。毎日うろちよろ散歩しちゃうあ、絵描いたりなんだり、ぶらぶらしてやがるんだ、いい歳した、働き盛りの男なんだが」

「セフィロスさんは生まれてこの方働いたことないのよ、ストライフさんの話じゃあ。そういうご身分なんですってさ」

奥方が話に入りこむ。

「ろくなやつじゃねえ、間違いいねえよ」

「パルマーソン氏は盛大に顔をしかめる。」

「大の男が、昼間っからふらふらと……金髪野郎のほうだって、のんきにバイクの手入れしたり、家の壁塗りがえたり。おまけに、どっちともがむかむかするようない男ときてやがる。うちの娘なんぞ、見た瞬間ころつといっちまいやがった。いっちょまえに色気づきやがって、まだ十三だぞ

……」

「どうやらパルマーソン氏が気に入らないのはそこらしかつた。

」とにかく、あんた、油売ってないでちゃんと確認してよ。あの人が今日引きとりに来る予定なんだから」

こうして奥方は愛想をつかして店へ戻ってゆき、パルマーソン氏はぶつぶつ云いながら、店の裏手にある倉庫へ向かうのである。

話題のストライフさんとセフィロスさんが町へやってきたのは、半年ばかり前のことである。北の海は短い夏の盛りであった。ノコギリソウが咲きみだれる野を、風景にちっともなじまないおそるべき大きさのバイクでもってかきわけて、はじめにストライフさんがひとり町へやってきた。そしてもう長いこと空き家になっていた、海辺の一軒家に住みついた。潮風にさらされたおんぼろの家を、ストライフさんは破格で買い上げたらしく、それからひと月ほどかけて、さまざまなもの運びこみ、かなりの修繕をほどこした。実にほればれするような働きぶり、小柄な体で木材を運んだり、ひよいひよい屋根にのぼっていつたり、チェーンソーをぶん回して丸太を豪快にばらしてしまったりした。

そのうち町の子どもたちの中に、ストライフさんの仕事の見学を日課にするのが出てきた。子どもたちは、ストライフさんが木の杭を打ちこんで作った柵の前に鳥のように一列に並んで、ストライフさんの仕事を見まもった。ストライフさんが買い出しやなにかでいなくなると、彼らは柵を越えてわっと敷地へ侵入し、ストライフさんの仕事道具や怪物みたいに大きなバイクや、ペンキ缶、

大きさをそろえて並べられた板などを目を輝かせて眺め、おっかなびっくり触ってみるのだった。そうしてストライフさんがなんの気なしに持ちあげる板や道具が、おそろしく重いのに気がついてびっくりした。うちの父ちゃんだってあんなに軽々とは持ちあげられないだろうと、町一番の力持ちを父親にもつ男の子は云った。

廃屋がどうにか家らしくなり、電気も通ったある日、ストライフさんはバイクでどこかへ出かけ、セフィロスさんとともに戻ってきた。定めし派手な女を連れてくるに違いないとか、いやいやこんな田舎へその手の女が来るわけがない、地味で目立たない女だろうとか、きつとあれは事業に失敗でもして、いちからやりなおすのだろうとか、さんさん好きに想像していた町の住民たちは、誰ひとりとして予想していなかった展開に驚いたものである。

セフィロスさんが来てからのちも、ストライフさんはしばらく家の改築にかかりきりだった。その間セフィロスさんはいえ、ぶらぶらしたり、庭の花に水をやったり、スケッチブックを持ちだして海を描いてみたり、バイオリンをもの憂く鳴らしてみたりと、貴婦人のごとく優雅に暮らしていた。どうやらストライフさんは、セフィロスさんをなになんでも労働から遠ざけるといいう、鉄のごとき固い信念でも持っているものらしかった。

「惚れぬいてんだよ、ありゃあ」

と、なんでもずばりと云ってのけるので有名な、町のアネリアばあさんは云った。

昨夜クラウド・ストライフは、雪が降っているにもかかわらず夜の八時を過ぎてから出かけてゆ

き、朝の八時を過ぎてから戻ってきた。彼はなにやら香ばしい香りのする紙袋と、うす汚い革袋を家のなかへ持ちこんだ。

この家の古びた外観からは、その内部を決して想像することができないだろう。玄関から一步入れば、室内は驚くほど明るい。大きな窓が海に面して開かれ、曇りがちな北の気候でも、日中は部屋の隅まで明るさがおよんでいる。インテリアは、むき出しの茶色い木材の質感を生かして、グレイの家具を置いて垢ぬけた雰囲気にとめられている。大きなカウチソファ、ジュートラグ、ごつごつした印象だが優しげなダイニングテーブル、赤く燃える暖炉の前に置かれた揺り椅子。家具はみな頑丈だが軽さを感じさせる工夫がほどこされ、重苦しい印象になるのをたくみに避けている。

クラウド・ストライフには、セフィロスという人物についておよそ譲ることのできないある一定の基準というものがある。自分が暮らすだけなら、彼はここを廃屋のままにしておいたろうが、セフィロスが暮らすとなると、隙間風が入らず、広々として、居心地のいい家具に囲まれた空間でなければならぬ。彼の愛する蔵書を収める本棚が必要であり、たいへんな長身をゆったりと横たえることのできるソファやベッドや椅子が必要であり、アトリエと書き物机も必要で、まぶしすぎない照明が必要である。そして庭には花が必要である。

クラウドが紙袋と革袋を持ちこんだとき、セフィロスは大きなカウチソファに脚を伸ばして座っていた。手には本を持っていたが、字面を追うのではなく、顔を上げてなにか考えこんでいた。クラウドはソファの空いたスペースに腰を下ろし、テーブルの上に紙袋を置き、革袋のほうは、テーブルの脚にもたせるようにして置いた。そして紙袋から、サンドイッチやら黒パンやらと一緒に炭

酸水の瓶をとりだし、食事にかかった。暖炉のぼちぼちはじける男が、静かな部屋のなかに響いた。年が明けてから、ひどく冷えこむ日が続いていた。冬になる前に、クラウド・ストライフは数日ばかりで薪割りをし、納屋に大量の薪をこしらえた。近所の子どもたちが、ストライフさんがなにかはじめたというのでさっそく見に来て、退屈な薪割り仕事を長いこと見まもった。まるでストライフさんがする仕事なら、ただの薪割りもなにか興味深いものなのだとでも云うようだった。

「カルファー・ファビアンソン教授が」

火のはじける音をやぶって、セフィロスが云った。

「午後から我が家でお茶をどうですかと云っている」

クラウドはパンをもぐもぐやりながら、ちらりと窓の外に目をやった。昨夜の雪は明け方にはやんでいた。空はどんよりと曇っていたが、雪が降ってきたそうには見えなかった。クラウドは窓から目をそらし、あまり興味もなさそうにうなずいた。

「おれ寝てる」

ナイフで炭酸水の瓶を開け、一気に八割がた飲んでしまう。飲食に興味のない人間が、とにかく喉や腹をなだめるためにするというのがクラウドの食事だった。

「彼と話をするために予習しているのだが」

セフィロスは手に持った本に視線をおくった。『ジェノバ戦役における「星の危機」とはなんだったのか——人間の宗教的心性の考察に代えて』カルファー・ファビアンソン著。

「相変わらずこの教授は独特なもの書き方をする。おそらく、文章が勢いよくほとぼしり出るのは

を必死に抑えているのだろうか。研究者としては、詩人が書くように書くわけにはいかないのでらうから。それでもおさえきれない熱情のようなものが、彼の文章に興味深い魅力を与えているのだが」

「あのじいさん、悪いやつじゃないと思うけど、お茶はしたくない」

クラウドは小さな丸い黒パンにかじりついた。

「退屈だよ。おれ二秒で寝る」

「そう云うと思った」

セフィロスは微笑んだ。

「危険性ゼロの穏やかな老人といった感じだからな。昔はどうだったか知らないが。文章を読むかぎり、かなり激的なタイプだったのではと思うが、いまではすっかり丸くなってしまったらしい」

「あいつの鼻眼鏡が、しょっちゅう鼻からずり落ちりゃいい。ゆるい靴下みたいに」

クラウドは云い、食事を終えて、紙袋にパンの包み紙を丸めて放りこんだ。それから紙袋をわきへのけ、革袋を取りあげて開くと、中に入っていた札束をテーブルの上にどさどさふり落とした。クラウドはぶつぶつ云いながら勘定をはじめた。

「考えてみたら」

クラウドは計算の合間に云った。

「おれこないだから五百万はすってるんだ。あやうく破産するところだった。大コケしたとき、隣の席に香水のきついお姉ちゃんがいる、どう考えてもそいつのせいで判断を誤ったって感じがする」

クラウドいわく、賭け事とは非常に鋭利で繊細な神経を要する、たいへんプロフェッショナルな仕事なのである。ツキや運に対する絶妙な感覚と判断が要求され、ルーレットにおいては数字と色に対する天性のひらめきが要求される。カードゲームに至っては、人間のもつありとあらゆる感覚を総動員しなければならない。そのうえなお幸運の女神が微笑んでくれる必要があるのだから、まったくたいへんな仕事であり、遊び半分のやつが手を出してよいものではない。そういう連中は、せいぜい数万ギル勝ったの負けたのと云って大き過ぎる程度が関の山である。だがこの道に本気になっている連中は、一度の勝負で年収か、しけた人生の生涯収入に匹敵するような額をどうにかしようとしているのだから、一回一回がまさに生きるか死ぬかの勝負であって、香水をぶんぶんさせてちやらちやらやってくるような女など、出入り禁止にしてほしいくらいのものである。

セフィロスはなにも云わない……クラウドがどうかして一から生活資金を作ろうとするときには、まずしばらくのあいだ、なにか肉体的労働をして元手をこしらえたあと、それをもって賭けに出かけてゆく。今回の場合は、クラウドはチョコボですら避けて通るような、道なき雪山の寒村への荷物運びに雇われて、かなりの報酬をもらってきた。それから今度はその金を、潔く賭けに投じた。クラウドの意見では、ルーレットこそ一か八かの賭けの神髄が詰まったゲームである。カードゲームは興味深いがあればどちらかという頭のいいやつやつのやるゲームであるし、スロットはあまり好きではない。「簡単すぎてつまらない」というのがその理由だ。クラウドは運を天とおのれの勘まかせにして、たいいてい半年は楽に暮らせるくらいのをこしらえて帰ってくる。ここから先は、山あり谷ありだ。全額すつてくることもあるし、途方もない額を勝ちとることもある。すつてんでん

になってしまうと、彼はうなり、おのれを呪いながら、また肉体労働に出てゆく。

とはいえ、クラウドはいくら金を儲けても、生活費と賭けの元手を残してほとんど全部セフィロスにやっつけてしまう。それでセフィロスが、毎日花に水をやって優雅に暮らしながら、蜂の巣を観察したり、稀覯本をオークションで落したり、ウータイの気鋭の書家の作品を匿名で買って支援したりするのを見て満足している。そうしておいて自分では、家を手入れするのとバイクを維持すること以外、とくに金の使い道がないときているのだ。

「百が八束……ひと束次の資金……残り箱の中に入れてとくから」

クラウドは革袋に札束を戻して立ちあがり、部屋の隅にインテリアの一部かなにかのように置かれていた宝箱を蹴りあげて開けた。そうして革袋をふって、札を中へ放りこんだ。宝箱に金が入っている、というのは、なぜかクラウドのロマンを非常にかきたてるらしかった。

それからクラウドは「風呂入って寝る」と云い、もう服を脱ぎながらバスルームへ向かった。賭け事は気力体力をいちじるしく消耗する仕事なので、クラウドは帰ってくるいつも泥のように眠りこむ。連日賭け事におぼれるなど、とてもできるものでない。ギャンブル狂いとほんものの勝負師の差は、そこでわかるのだと彼はいう。

バスルームに向かったはずのクラウドがひょっこり戻ってきた。

「どうした」

セフィロスは上半身裸のクラウドに声をかけた。

「あのじじいときあうのはいいけど、あんまり気を許すの、やっぱ考えものだと思う」

クラウドは目を細めてセフィロスを見た。

「おれはあのじいさん、信用できない」

それだけ云うと、クラウドは引っこんだ。セフィロスはばちばちまばたきし、それから愉快そうに考えこんだ。

カルファー・ファビアンソン教授は、長くアイシクル地方の大学で教授を務めた人物であり、専門である宗教学の著作によって広く世界にその名を知られていた。二年前、大学を定年退職し、生まれ故郷であるノルズホフに戻ってきてからは、長年にわたる研究の成果をまとめる作業にとりかかる一方、一般向けの書籍の執筆にもとりくんでいた。高い鷲鼻の上に鼻眼鏡をかけ、優しげな小さな目をいつも心なしかしよぼしよぼさせているこの老教授に、故意に近づいたのか偶然がそうさせたのか、セフィロスは知らない。そんなことはどちらでもいいことだ。大切なのは、彼の専門が、三十年前に列聖されたばかりの、ジェノバ戦役における災厄の源「セーファ」の宗教心性史からの研究であり、この人物の時代的、社会的、精神的意義を研究することに人生をささげてきた男だということである。

彼の処女作『危機の時代の英雄——神なき民のアナテマ』は、著者三十代前半の著作であるが、学術書としては異例の売り上げを記録し、地方大学の講師にすぎなかったファビアンソン氏を一躍有名にしたものである。この一冊の書物が、歴史におけるセーファという人物の評価を決定したともいわれており、発売から四十年ちかくが経ったいまでも、研究者たちの必読書という地位を保ち

つづけている。その「はしがき」に、若き講師はこのように書いている。

わたしの研究動機は、いまも昔も単に、この傑出した人物とそれを生み出した時代的精神と
いったものに異様に興味を惹かれるという、ただそのことであるにすぎない。神話の英雄であ
れ実在の英雄であれ、あるひとりの人物のもとに衆人の関心が集中するとき、そこにひとつの
引力が生まれ、場が生まれ、それは数多くの人間の情動的エネルギーを巻きこみながら自律的
に展開するものである。セーファという人間がこの星に生んだ場そのもの……彼は疑いようも
なくあの北の大空洞を中心とした場を持ったのである……のもつエネルギー、彼の悲劇、その
ドラマトゥルギー、彼という存在そのものを生みはぐくんだ時代が背負っていた宿命のような
ものに、なにか共感に似たものを覚え、いいようもなく惹かれてゆくのを感ずるのみである。
歴史的人物はなぜ生まれるか？ なぜある人間が崇拜の対象になり、象徴になり、時代を、世
界を背負わねばならないか？ 極言すれば、わたしはただそれが知りたいのである……

情熱にあふれた、気鋭の研究者の言葉。その文章をはじめて読んだとき、セフィロスは思わず微
笑んだものである。クラウドがノルズホフに家を見つけたと云い、引退した教授がそこに住んでい
るとわかったとき、セフィロスはなにも云わなかった。それは偶然であって、偶然ではなかった。
クラウドは単にカジノに通うことができる町を探しもとめただけである。騒々しい都会であっては
ならないが、ひどく不便な場所であつてもならない。ノルズホフは、その意味で具合のいい町だっ

ただけのことだ。その町に生涯にわたって自分のことを研究していたらしい男がいることを打ちあけたとき、クラウドはひどく微妙な顔になった。

「……そいつ、あんたのこと好きなの？」

「どうだろうな。名前が別で、伝わっている容貌も別となれば、もはやおれではないような気がする」

クラウドは、でもあんたはあんただ、とぶつぶつ云った。そして非常に疑り深い顔でセフィロスを見、

「あんたさ、ほんとに記録全部抹消したんだよな？ おれのことも含めて」

「そのはずだ、少なくとも映像と書かれてあるものについてはすべて」

ジェノバ戦役から百年ちかく経ったころ、そろそろなにをするにも飽きてきたセフィロスは、自分の名前を世界じゅうから抹消するという楽しい任務を思いついた。セフィロスはしばらくその考えを頭の中で転がしていたが、やがてクラウドに云った。聞いてくれ、おれはすばらしいことを思いついた、自分の名前を歴史から消してしまうのだ、といっても、なにも歴史を改変しようというのではない、ただおれの名前と容姿とを、ちょっと別のものにすり替えるのだ、そうすれば、おれもおまえも「セフィロス」なる名前にいちいちびくつかないでもよくなって、どこでも気軽に出入りできるようになり、たいへん具合がいいのではないだろうか……。

クラウドはふうん、と云って、すこし考えこんだ。それから、あんたが消えるならおれも消えないとおかしいと云い、セフィロスの名前とともにクラウドの名前も抹消されることを望んだ。クラ

ウドの場合はもつと徹底しており、名前や容姿だけでなく、存在そのものが消し去られることを望んだ。いわく、メテオを呼んだやつが存在が歴史から消えるのは無理だけど、おれひとりがいなくなるくらいなことない。ジェノバ戦役の英雄って云われてるやつは、ほかにもいっぱいいるから。

そのころ、ジェノバ戦役にかかわる研究は、ようやくいくばくかの生々しさを脱ぎすてて、より客観的で多角的な段階に突入しようとしていた。それまでは、あの災厄を直接経験した人間がまだ生きており、当時の記憶を持ちつづけ、語りつづけていた。戦役を戦った者たちの遺族や親族が、まだ一族の英雄の像を誇らしく胸に抱いていたし、コスモキャニオンのナナキも、ようやく落ちついた若者の年齢にさしかかり、あの出来事の表面だけでなく、内的な意味をさぐる準備ができていた。それまでは、彼はまだまだ子どもっぽい自分の感情にふりまわされて、あの複雑な現象を全体として受けとめることが難しかった。

「よし、まずはナナキを締めあげて黙らせよう」

クラウドがさつそく出て行きかけたので、セフィロスはあわてて止めた。そう短絡的になってはならぬ、これは長期的計画なのだ。セフィロスは云いきかせた。コスモキャニオンの友人は確かに黙らせねばならぬとしても、より重要なのは文字、すなわち書物や記録のほうなのだ。文字の生命の長さしぶとさたるや、一度書かれたとなると数千年は生きつづける。こちらを変更してゆくことだ、それも気づかれずに、こっそりと。

書物と聞いてクラウドはすぐに興味を失った。そこでその作戦はもっぱらセフィロスのものにな

り、セフィロスは研究書や資料の改竄という、世にも楽しい仕事にとりかかったのである。およそ二百年という年月をかけて、「セフィロス」という名は消えて「セーファ」にすりかわり、クラウド・ストライフという男は消えた。ほかの仲間たちとちがって、クラウドの故郷はすでになかったし、家族も残っていなかった。クラウドに愛着をもってその記憶を保とうとする人間は、コスモキヤニオンの友人と、元タークスの男をのぞいて、もはや地上から消えていた。セフィロスのそれは、もとよりなかった。

歴史から消えることは、はかりしれない自由を意味する。死は真実に解放である。地上からひとつの存在が消え、その失われた唯一性が痛切に感じられるとき、存在ははじめて永遠を獲得する。そしてその人に関する記憶が、人びとのあいだから時の経過によって拭いさられたとき、その人物ははじめて固有であることの自由を、真実に自己を所有することの自由を手にするだろう。歴史に名を残すことは、死してなお偶像の役割を果たしつづけることでもある。セフィロスは結局、生まれてこの方「セフィロス」なる存在としては一度も自由になったことがなかったわけである。災厄の前にも、そののちにも。

災厄の元凶「セフィロス」の評価は時代によって変転をくりかえした。あるときは悪の親玉のように扱われ、あるときは悲劇の英雄として持ちあげられ、またあるときは、単にジェノバという知的生命体の興味への延長上に存在するに過ぎなかった。セフィロスは確かにそれを楽しんだ、学術論文のなかで議論される「セフィロス」はセフィロスの客体であり、それは常に自己であって自己でなかった。主体としてのセフィロスは、客体の自己を生きるすべをもたず、所有したり制御した

りするすべも持たない。彼はつまり、そうした手あかのついた「セフィロス」の客体に、もはや我慢ならないところまで来てしまったのだ。長い銀髪を揺らす美しい悲劇の英雄「セフィロス」を抹殺し、その名を「セーフア」にすりかえたとき、セフィロスは自分の背負っていた重みが、はじめて霧消するのを感じた。

「で、ようやくセフィロスって名前はあんたのものになったんだ」

クラウドはときどきびびくりするほど深い洞察を秘めたことを云う。彼のそれは直観であり、決して思索を伴わないけれども、その直観でもって彼は、セフィロスと同じほど深いところへ降りてくる。

「おれ、あんたの名前呼ぶのがなんとなく怖かったんだよ。気おくれしてたっていうか」

クラウドはこれまで数えるほどしか目にすることがないと思われるような、静かな優しい目をしてきた。

「重すぎたからな、あんたの名前」

そしてクラウドもまた真実にセフィロスの名を所有することに成功した。セフィロスがセフィロスという名のただひとりの持ち主になったとき、それは必然的にクラウドのものであった。そしてジェノバ戦役で中心的な役割を果たし、悲劇の英雄セフィロスと深い因縁でむすばれていたクラウド・ストライフの存在が歴史から消滅したとき、クラウド・ストライフもまたある意味で過去の亡霊をふりはらうことに成功したわけである。彼らのこの星での関係は、もちろん過去であったものだった。だがその過去がもはや桎梏であるにすぎないのなら、それほど先へ進んで過去が単に過去

になってしまったのなら、その暗い檻のような過去を扉の向こうへ押しやることは、人間のひとつの権利であり義務ではなからうか。

そしておれはカルファー・ファビアンソン教授に出会った……セフィロスは歩きながら微笑んだ。ある日、偶然に古本屋で。本棚の高いところにある書物を、通りがかりにセフィロスがとってやったのだ。そのときは、教授は通路に背を向けていたために、セフィロスはそれがファビアンソン教授だとは思わなかった。ただその本のタイトルが、かつて……もうずいぶん昔のことである……興味深く読んだものだったために、セフィロスは思わず「ああ！」と云い、その声で教授がふり向き、ふたりの本好きは目を見あわせることになった。そしてそれでもう、すっかりなにもかも通じてしまった。その日ふたりはあまりに長いことお茶をしたため、日が暮れたのに気がつかず、クラウドがいらいらして町へ探しに来たほどである。

ファビアンソン教授の家は、町の目抜き通りからしばらく歩いたところにあって、セフィロスの海辺の家からは小一時間の散歩になった。セフィロスはときおりその散歩をして、ファビアンソン教授の自宅へ向かった。ファビアンソン教授もまた、ときどき足を伸ばして、セフィロスの海辺の家を訪れた。そんなときには、クラウドはきまってバイクにまたがって逃げだした。

ファビアンソン教授は独身で、おまけにひとり息子だった。去年、百年ちかく生きた母親を見おくれたばかりだ。教授の書齋は、本好きの天国の様相を呈している。天井まで届く棚にずらりと本が並び、それが何列にもなって書き物机をとりかこんでいる。机の上には参考書籍が何冊も開きつ

ばなしになっており、机の横にも本が積まれている。教授の専門分野であり執筆者の一人として製作にたずさわった『宗教思想用語辞典』はおそらく閉じられたことがないだろう。セフィロスがやってくる、教授はたいへんうれしそうな顔でセフィロスをこの書齋へ案内し、どうかソファにかけてくれるように云う。そして手ずからお茶を淹れ、戻ってくると、セフィロスはたいいながらの本にかじりついているというわけで、そこから話ははじまるのである。

だがこの日のふたりは、いつもとはやや様子がちがった。ファビアンソン教授がお茶を運んできたとき、セフィロスはまだソファに座って、つるつると光沢のあるパンフレットを手にしていたからである。パンフレットのタイトルは「巡礼の誘い……聖セーファ列聖三十周年記念式典特別企画」。「巡礼の開始は一月十三日です……」

かちやかちやと小さく音を立てながら、教授がテーブルにお茶のカップを並べる。金のふちどりがほどこされた上品なカップ、お茶うけには宝石のように美しく整形されたチョコレートがある。「十三日にアイシクルロッジを出発し、八日間をかけて、ガイアの絶壁のふもとにある巡礼村に向かいます。そして翌二十一日の午前十時から行われる講演会と聖人のための典礼に参加する、というプランです。典礼は二時間近くにわたるものなのですよ……古い典礼楽曲を復元して……だいたい一〇〇〇年ごろのもの……聖職者にも経験のない典礼なのです」

教授は興奮していた。パンフレットによれば、聖セーファ列聖三十周年を祝って、この聖人の記念日にして致命日である一月二十一日に、絶壁のふもとにある聖セーファ聖堂にて、研究者による記念講演と特別の典礼がささげられるのである。講演者の一覧には、もちろんこの分野の第一人者、

ファビアンソン教授の名があがっていた。

「わたしは残念ながら、巡礼そのものに加わるにはもう歳をとりすぎました」

教授は心なしか悲しげに云った。

「それに講演の前に疲れて倒れるわけにもいきませんし。昔は毎年夏になると、教え子たちを連れて巡礼したものです……当時は、テントをかついで野宿しながら向かったものですよ。道もほとんど整備されていませんでしたし、標識なんかももちろんなかった。当時のわたしは、並の登山家などよりよほど危険な目に遭っていたものです……ツアーを主催しているトーベ夫妻は、わたしのその毎年夏の巡礼を、いわば引きついでもくれたのですね。どちらもわたしの教え子なのですが、彼らに巡礼ガイドの役割を譲りわたして、もう二十年にもなりますか……」

教授は頭の中の思い出をなぞるように目を細めた。

「二十年……列聖三十年……なんだかずいぶん昔のことに感じられますね……」

セーファというひとりの歴史的人物が列聖されるにあたっては、ファビアンソン教授のあの処女作『危機の時代の英雄』が決定的な役割を果たしたのだと、世間では云われている。ファビアンソン教授は著書のなかで、教会があのだジェノバ戦役をいかにとらえ、神の救済の歴史のなかに組みこむべきかという問題にかなりつつこんだ言及をしているが、本が売れたこともあって、しだいに教会はこの問題を無視できなくなり、ついにセーファ列聖という形で応じたのだった。だが教授に云わせれば、それもまた時代の流れだということだ。自分が著作を発表する前から、機は熟していた。人類は、四百年という時を経て、ようやくあの出来事を消化しつつあるのだ、と。

教授が処女作を発表してしばらくたったところから、北の大地には、大空洞へ向かう巡礼者があらわれはじめた。厳密にはその前から、なにかのきっかけでセーフアという人物に惹かれた人間が、彼のいた場所へ向かうために、そこで彼に出会うために、絶壁のふもとまで歩きぬくという行為をしていたことはあった。だがそれは世間にはほとんど知られていなかったし、あくまで非常に個人的なものであった。巡礼などという行為は、もう何百年もあまり顧みられていなかった。ごく一部の熱心な信者のあいだにだけ見られるもので、一般の人々の耳目を引くことなどなかった。

それが、セーフアに関してはそのうでなかった。みずから巡礼者と称し、アイシクルロジからイアの絶壁までを歩きぬく巡礼者たちの列が、しだいに増えていった。ほとんどの者は夏場に歩いたが、中にはジェノバ戦役の英雄たちが大空洞へ向かったのと同じ時期に巡礼するのだとあって、真冬の寒さの中を歩きぬく者も出てきた。そしてセーフアの致命日である一月二十一日に、絶壁の前に立ち……そこから先は普通の人間には進むことが不可能だったので……四百年前のあの出来事に思いをはせ、奇跡的に生き残った人類のこと、自分たちの運命、星と人類とのかかわりなどについて、問いを投げかけ、祈り、話す相手のいる者は互いに話しあった。

セーフアの列聖を機に、こうした巡礼者の数は飛躍的に増えた。巡礼の道の中には、簡素な休憩小屋のようなものや、以前の巡礼者が好意で作って置いていった看板のようなものがところどころに設置されてはいた。だが道は整備されておらず、宿のようなものもなかった。当然のことだが、安易な思いつきで巡礼をはじめたせいで遭難する者や、死亡する者も出た。中には自殺するためにわざわざやってくる者もいた。こうした事態に危機感をいだいたアイシクルエリアの各自自治体は、

共同で巡礼道の整備と、宿場の建設に着手することを表明し、企業の支援や一般の寄付を募った。すぐにいくつかの企業が名乗りをあげ、熱心な人々が寄付金をおくった。

こうした支援によって、巡礼コースは八つの区間にわけられ、それぞれに宿場が設けられ、絶壁のふもとには巡礼村と呼ばれる小さな集落までできた。巡礼の果てに、そこに定住したいと思う者もいたのである。最後の仕上げに教会が、その村の中にセーフアを記念した聖堂を建て、司教座を置いた。そしてますます巡礼は盛んになった。フアビアンソン教授は、こうした経緯をセーフア研究の第一人者として、またもつとも頻繁に巡礼した人間として、見守ってきたのだ。

「そういうえば、トーベ夫妻がよろしくと云っていましたよ。お連れの方が、荷物持ちをしてくださるといので助かると」

教授がカップを口もとへ運びながら云った。ツアー主催者のトーベ夫妻は、いつも荷物持ちとして一緒に巡礼してくれる男をひとり雇っていたのだが、その人が今年はどうしても都合がつかなかった。それで夫妻は代わりを探していたのだが、その話を聞いた教授は、セフィロスの連れのクラウド・ストライフが、ときどき荷物運びの仕事をしていたことを思いだし、アイシクルエリアの雪道にも慣れていることから、ひとつ仕事をしてみる気はないかと提案してきた。セフィロスがその話をクラウドに持っていくと、クラウドはしばらく片目を細めてセフィロスを見つめたあと、「あなたの巡礼ツアー」とぼそりと云い、「やる」と云った。

教授はまた、セフィロスを記念式典に招待してくれた。セフィロスもセーフアという人物に並々ならぬ関心があり、さまざまな文献を読みあさっているのを知っていたからである。セフィロスが

巡礼ツアーのほうも参加していいだろうかと訊ねると、教授は喜んで手配をしてくれたが、その話を聞いたクラウドは、セフィロスが教授から貢がれているのではないかと疑った。そしてそんなことは自分の権利に対する侵害だとばかりに、みずから教授に旅行の代金を払いに行った。

「巡礼は十一人のグループになるそうです。今回は申し込みが多くて、抽選にしたと云ってしまた……やはりこの聖人は、非常に人気があるのですねえ。こういう下世話な話はあまり好きではないですが、聖セーファ聖堂は、その立地を考えれば驚異的なほど潤っているようです。このような大規模な式典を開催できることからわかります。式典に申しこんでくるのは、若いお嬢さんやかつて若かったお嬢さんが多いようですよ。さもありませんというところですよ。いまも昔も、悲劇の英雄は女性に人気があるのでしょう……わたしのゼミも図らずもいつも女学生ばかりだった……」

教授は苦笑を浮かべた。

「セーファはどんな容姿をしていたか、なんてほうにばかり興味を持ちましたね。当時の映像記録が失われているのは、なんととっても惜しいことです。非常に美しい青年だったという伝聞ばかりが残っていてね。芸術的な素養のある学生は、想像で絵を描いたりしていました」

教授はセフィロスにチョコレートを勧め、自分もひと粒口へ放りこんだ。

「列聖の前、聖画の画像を確定するための会議にわたしも参加したのですが、これが実に紛糾してね。なにしろ、決定的な記録がないわけですから。ある伝聞は金髪碧眼の美丈夫だったと述べており、ある資料によればうるわしい巻き毛、また別の資料によれば栗毛の美青年というわけで。そのどれも捨てるには惜しく、捨てるには足りない。結局、確たる証拠がないうちは伝統に従えとい

うわけで、古い天使の図像を流用するような形になってしまつて。東方的な、あの茶色い巻き毛を垂らした美青年ですよ」

聖セーファのアイコンを見た瞬間、クラウドは大笑いしたのだった。長い茶色の巻き毛を肩に垂らした憂い顔の青年が、片手に剣を持ち、胸の前でもう片方の手を祝福の形にしている。クラウドはげらげら笑いながら、セフィロスが茶髪になつてゐる、ぜんぜん似てない、こんなのあんたじゃない、と云つた。そしてセフィロスの長い銀髪が、象徴としての意味を完全に失つたのを確かめるように、感慨深げに眺めたのだった。

「セーファがなぜ列聖されたかという問題はひとまず措くとしても」

セフィロスはお茶のカップに鼻を近づけ、香りを嗅いだ。冬にふさわしい、力づよく重たい香り。それが書齋の独特のにおいに混じつて、なにかつかしい記憶に訴えかけている。

「なぜこの聖人がこんなに人気を集め、巡礼者を惹きつけるのだろう。わたしにはそれが疑問なのですが」

セフィロスはなんととはなしに、英雄と呼ばれたころの自分のことを思いだしていた。あのころのセフィロスも、一種の崇拜の対象ではあつた。セフィロスにはそんなものを求める気持ちはまるでないのだが、自分の人生には、どうも謎や崇拜や象徴といったものがつきまとつてゐるように思われてならなかつた。

「そのせいで、なんだか自分も巡礼をしてみようという気になつてしまつた。もちろん、連れが栄えある荷物持ちに選ばれたということもありますが」

セフィロスの話を、教授は真剣な顔で聞いた。この教授は、どんな話にも研究にのぞむときのよ
うな態度で応じるのが常だった。

「人はなぜ聖人や英雄や偶像を作りだし、それにすがらずにいられないか？ 教授の前回の著作で
は、特にそのことがテーマになっていましたが、これは非常に興味深い問題だ……人間そのものの
問題……」

「人間が誕生したのは、神が誕生したときなんですよ」

教授は微笑んだ。鼻眼鏡の奥の目が、いたずらっぽさを帯びてきらめいた。

「なにものかを崇拜するということを覚えたとき、人は人になったのです。その対象にいけにえを、
花を、供物を、自分の持っているもつともよいものをささげるようになったとき、人間はほかの動
物から決定的にわかれてゆきました……その崇拜の頂点に『神』というものを置いたのちには、古
代種からも……人間には、どのような形や方向性であれ、なにかしらの崇拜の対象が必要であり、
象徴が必要なのだと思います……非理性的な情動や衝動やあらゆる欲求、聖なるものへの希求……
こうしたものは、現代文明社会の中からは往々にしてこぼれ落ちてしまうのですが、疑いようもな
く人間の必須構成要素とでも云うべきものです。そうしたものが健全に機能する余地を、社会の中
に残しておくこと……それがなにより大切なことであるとわたしは云いたいのです。聖人崇拜とは、
そうしたもののひとつでしょう……」

ファビアンソン教授は、なにか内面にある深いものを見つめるように、目を細めた。

「その中でも、セーファはとりわけ魅力的な人物だと思えますよ。彼は真に崇拜……というのが大

げさなら、尊敬に値する人物だと思いますね。人間として」

教授はセフィロスを見つめ、微笑んだ。

「巡礼をしてみれば、きっとなにかおわかりになることがあるでしょう。巡礼をする中で、あなた自身の巡礼の動機も、よりはっきりと明らかになるでしょう……たいていの人は、自分が巡礼をする理由を、巡礼しながら発見し、確かめていくものです。はじめはこうと思っていたものが、実はそうではなく、もっと深い意味をもっていた、というのは、われわれの人生にはよくあることですからね」

だが自分で自分の巡礼ツアーに参加しようなどとは、この星の長い歴史をたどっても、きっとセフィロスが最初ではあるまいか？　そしておそらくは、最後になるのではなからうか？

二、巡礼

アイシクルロッジ

アイシクルロッジは、幾世紀を経てもあまり変化のない町だ。冬場は相変わらず雪が深く、昼には雪からの照りかえしの光が、夜には月明かりと、家々から漏れでて雪をあたたく染める明かりが、町を童話のような色彩に仕上げている。クラウドは寒いので、鼻先が赤くなった。宿に入ると、彼は北国の人間らしく慣れた手つきで、赤くなった鼻や頬を指先でこすって温めた。この地方の素朴なシチューは、いつもクラウドに母さんの味を思いださせるということだった。

彼らは宿で、巡礼の一団と合流した。下は十代から上は五十代に至るまで、さまざまな年齢の、多くは女性たちだった。男のほうはその連れあいというわけだ。巡礼の案内人を務めるのは、教授の秘蔵っ子であり、大学の客員教授をしているマティルダ・トーベ氏と、その夫で地質学者のアーノルド・トーベ氏だ。巡礼村の住人であるふたりは、ともに四十代で、学者というより登山家のように見える、アウトドアブランドの服が体になじんでいる。マティルダ・トーベ教授は細身の芯の強そうな体つきをしており、美しい栗色の髪を頭の後ろできっちり団子にまとめている。アーノルド・トーベ氏は眼鏡をかけた熊男というような風采で、大柄で分厚い体に、ひげもじゃの顔がくっついてる。

参加者たちは、大学院生、画商、研究者などさまざまである。妻についてきた夫というのがふたりいたが、女性ばかりの集団になんとなく肩身のせまそうな顔をしており、男ふたり連れのセフィ

ロスとクラウドにさっそく近づいてきて、親交をあたため、落ちつかない気持ちをなぐさめようとした。四十代の厳しい、内省的な顔の男は、画商の妻を持つフォドル氏で、自身は画家である。もう少し若い三十代半ばの男は、研究者である妻と結婚したばかりのヨルム氏で、カームの東にある農園で、自然農法でワインをつくっている。ニンジンのような髪色をして、なんとなくまぶしそうな目をしている。

一座の最年長は、ともに五十代で同性婚をしている、アグネス・デュワー氏とホノリア・キラン氏だった。キラン氏が巡礼を希望し、作家であるデュワー氏は、次の作品にアイシクルエリアの風俗とセーファ巡礼をとり入れようと考えて、取材のためにくつついてきたのだ。

そのほかに、ひとりで参加している大学生のスーラ・ビヨルンズドッテルがいた。まだ十九歳で、暗い金髪の下顔は、内気で、常になにかに身構えているように見える。年上ばかりの集団のなかで、なんとなく寂しげな表情でまわりを眺め、ときどき自分と歳が近い（ように見える）クラウドのところで視線を止めたが、話しかける勇気が出ないようだった。

夕食の席では、八日間の巡礼仲間になるこれらの人々が、互いに自己紹介をしたりされたりしたいへん陽気に過ごした。社交の大きらいなクラウドは、もくもくと食事をかきこんで、女性たちの興味津々の視線を無視してさっさと部屋に戻ってしまった。「おれあんたほど頭よくないから」というのがクラウドの弁だった。

「どっかどうっかりボロが出そうでないやなんだ」

クラウドは部屋に戻って正解だったかもしれない。というのも、一座はこれまたクラウドのきら

う「頭よさそうな会話」をする人種に満ちていたからである。クラウドの意見では、ライフストリームの形而上的意味だの人類の実存的問題だのといった話をするのは、この世にセフィロスひとりだけでじゅうぶんだし、ひとりだつて多すぎるくらいである。それはつまり、セフィロスにとつてはここは会話の花咲きみだれる天国だということでもある。セフィロスはすでに数多くの著作を出版しているマティルダ・トーベ教授と知りあう機会を得たので、話が尽きなかった。トーベ教授は、フアビアンソン教授の研究を受けつぎ、セーファというひとつの現象にひそむ人間心理を追究するとともに、社会において人間の呪術的心性や崇拜の感情がより適切な場を見出すことができるように、さまざまなとり組みを行っていた。

「わたしが夫と一緒に、毎年この時期に巡礼ツアーを開催しているのもその一環と云えるかもしれません」

教授は美しい琥珀色の目をやらわかく周囲に注いでいた。眉や目もとは釣りあがり気味でややきつい印象を与えるのだが、なめらかで女性的な形をしたひたいや頬がその印象をかなりやわらげている。

「古代種たちは、人生をひとつの旅と定義してきました。人類の多くはその後、定住生活に移行しましたが、それでも人生は魂の旅であるという認識は、わたしたちの無意識に深く浸透しています……ほとんどの人には、吹雪の荒れくるう一月の雪原を越えて北の果てへ巡礼しようなんて、狂気の沙汰に思えるでしょう。でも、それでも毎年必ず一定の数の人々がツアーに参加を希望するんです……どの参加者も、八日間の過酷な巡礼に参加するだけの深い内的な動機を秘めています。たと

えそうとは見えなくても」

トーベ教授は一同を眺めわたして、そっと微笑んだ。参加者たちは大きなテーブルを囲んで、陽気に酒を飲み、はしゃいでいた。明日からはこのような気楽さも安楽も、しばらくはおあずけになるのだと知っているかのようだった。

「人は人生に何度か、過去をふり返り、清算しなくては先へ進めないことがある」

セフィロスはテーブルに肘をつき、顔の前で両手の指先をつきあわせ、物憂げな顔で云った。

「これまでの自分の生き方が、身につけてきた様式が、もはや自分に合わなくなってきているのに気がついて……自分がサイズ違いの、似合わない色の服を着ていることに突然気がついて。そして魂は大きな危機に直面する。突然暗闇のなかに、裸で放り投げられたように感じる。自分はこれまでなにをしてきたのか、なにか意味のあることをなしとげてきたのだろうか、なにかまったく間違ったことを、これまででしていたのではないだろうか……そんな焦燥感に駆られて、やみくもに走りまわり、混迷を極めて、もはやなににすがったらいのかすらわからない」

トーベ教授は、非常に興味深いといった顔つきでセフィロスの顔を見つめた。

「なにか光が欲しい、暗闇を照らす光が。巡礼とは、そうした光を見出すために、暗闇を歩きぬく行為なのだと思います。それを魂の中だけで果たす人間もいるし、こうして実際に過酷な環境に身を投げだして、外的なものとして経験する人間もいる。だがその違いは問題ではない……巡礼の旅を歩きぬくというその行為じたいが、すでに光を自分のほうへ引き寄せているのだから」

「……教授が、あなたをとっても興味深い人物だと云っていたけど」

トーベ教授は相変わらずセフィロスを見つめていたが、その目はやさしい好奇心に満ちていた。「少しわかったような気がしますよ」

「ただの無職の暇人ですよ」

セフィロスは微笑み返した。

ワインづくりのヨルム氏が、みんなに自作のワインをついで回っていた。彼はセフィロスと教授が話しこんでいるところへもやってきて、白と赤がありますと云って両方ともグラスに注いだ。

「野生の野の花の香り」

セフィロスは白ワインのグラスに鼻先をつっこんで云った。

「ミツバチの羽音がする。小さく低く……」

セフィロスは口を閉じ、鼻のなかで羽音を再現した。

「きつとぼくが子どものころ、よく遊んだ野原でしょう」

ヨルム氏はまぶしそうに微笑んで云った。

「近くに住む伯父が養蜂をしていました。野原にはよくミツバチが飛んできました……ミツバチの羽音を聞きながら、背中や脚に野の草のちくちくする感触を感じて、空を眺めるのがぼくは好きでした……伯父のところでミツロウづくりをよく手伝ったのを思い出します。ロウの色も香りも少しずつ違うのがわかるかい？ ハチの集める蜜の違いなんだよ、と伯父は云いました……あのなんともいえない甘い香り……」

テーブルの三人はうっとり目を閉じ、ため息をついた。ヨルム氏の妻のマーガレット・ハフタ

夫人がそれを見て、苦笑を浮かべた。

「あまり夫をつけあがらせないでください」

理知的な顔をしたマーガレット夫人は、おそらく夫よりかなり年上で、ぴしゃりと打ちつけるようなものの云いかたをした。背が高く、痩せていて、口もとには微笑を浮かべていたが、なんとなく高慢そうで近づきたい印象があり、目にも相手を品定めするような感じがある。

「この人、ワインさえあればすぐにのぼせあがって、どこまでものぼっていつてしまうんですから」「人生に必要なのはパンとぶどう酒と太陽と雨ですよ」

ヨルム氏はグラスを片手に云った。

「それさえあればぼくはしあわせなんだ」

トーベ教授が、マーガレット夫人になにを研究しているのか訊ねた。

「いろいろあって、いまは生態学を。先ほど、あなたのご主人と土の話で盛りあがってしまいました」

マーガレット夫人は、画家のフォドル氏と親交を深めているアーノルド・トーベ氏に目をやった。ひげもじゃで眼鏡をかけたトーベ氏は、多くの熊男がそうであるように、非常に優しそうな目をしていていた。

「地質学者には、この北の大地はたいへん興味深い研究対象でしょう」

セフィロスが云ったのをきっかけに、熊男のトーベ氏が話に加わった。

「悲しいことに、大空洞の研究はほとんど進んでいません」

「嘆かわしいというように首を振って、トーベ氏は云った。

「第一に、大空洞をとりかこむ気流に阻まれて、近づくのが容易ではないということ。第二に、たとえ中へもぐりこめたとしても、あそこは地底から高濃度のライフストリームが湧いてくるので、みんな具合が悪くなってしまうということです。ガスマスクかなにかでふせげたいのですが、ライフストリームに対しては、そういう物理的な手段はあまり効果がないんですね」

「ライフストリームって、ほんとうに地面の下にあるのですか？ 学校ではそう習いますけど」
「画商のフォドル夫人が質問した。ブルネットのくるくるした巻き毛が魅力的な女性だ。

「そうです。われわれの星の構造は、中心にコアと呼ばれる金属の核があつて、そのまわりをライフストリームがとりまいています。そのさらに上に、岩石からなる層と地表があるわけですが、ライフストリームの濃度は、コアに近づくほど濃くなり、地表に近づくほど薄くなります。ジェノバの飛来によって、星はコアまで浸食される深刻なダメージを受けました。その傷は、二千四百年を経たままも、まだ回復しきっておらず、ようやくかさぶたがかかって、じゅくじゅくしたのがおさまってきた、というところでしょうか。ですから北の大空洞は、地上で一番濃度の濃いライフストリームがあらわになっている場所というわけです」

「傷ついた星……わたしは数年前、ひよんなことからそれをテーマにして作品を描こうと思いたつたのですが、真っ先に考えたのがあの空洞とジェノバ戦役のことでした。それからずっと、この北の大地に來たいと思っていたんですよ」

「画家のフォドル氏が云った。」

「四百年も前の事件ですが、歴史的な事件がすべてそうであるように、あの出来事もまた現代のわれわれに非常に生々しく訴えかけるものもっています。われわれの繁栄とはなにか？ 星の生命とわれわれとの関係は？ われわれ人間は、相変わらず星の厄介者に過ぎないのか、それともなになしこの星の一員だといえるような存在だろうか……そしてその問いの中心にいるセーファという男ですわ……」

「夫がセーファに興味をもつなんて、意外でした」

フォドル夫人が夫を見つめて云った。

「世の中には神話や信仰に強い影響を受けて創作をするタイプの芸術家もいますけど……そういう人たちを神秘的な芸術家と呼ぶとしたら、夫は理性的な芸術家とも呼ぶべき人で、彼の創作の源は思想や哲学や歴史にあるんです。人間の活動に、といったらいいのかしらね……」

「セーファはきわめて活動的な人間だよ。活動的な人間であり、思想的な人間であり、神秘的人間でもある」

「それが彼の興味深いところだと思っんです。歴史にはときどき、ほんとうに大きな人物というのがありますけど、そういう人物は、たいていそのすべての顔をもちあわせていますね」

トーベ教授が云った。

「あなたはなにを考えていらっしゃるんですか？」

ヨルム氏が、セフィロスが微笑んだのを見て訊ねた。

「いや」

セフィロスは笑みを深めた。

「いまの話聞いていて、その時代に勢力をもった神羅カンパニーの社長のことをふと考えました。神羅カンパニーはほとんど世界を支配するところまで行きかけたが、なぜ挫折したかといって、社長に神秘性が足りなかっただけのことかもしれないと思って」

「カリスマというのは主に神秘性からなっているんだと思いますよ」

作家のアグネス・デュワーが会話に入ってきた。白髪の目立ってきたブルネットをそのままにシヨートカットにして、大ぶりなピアスとネックレスをつけていた。細身の彼女には、それがよく似合っていた。

「すごい能力を持っていたり、なんとなくわからないところがあったり、なんだか自分たちと違う……そういうのが人を惹きつけるわけでしょ」

大きな身ぶり手ぶりで話すアグネス・デュワーの横に、パートナーのホノリア・キランがひっそりと座っていた。こちらは長い髪をうしろでひとつにまとめた、あまり目立たない女性だった。アグネス・デュワーの秘書のような仕事をこなしているらしい。どことなく影のような印象のある女だ。

「でもそういう神秘のヴェールって、勝手に肥大してしまって、はぎ取ってみると、中身は案外つまらなかった、なんてことになったりもするのよね。セーフアって人がどうだったかはわからないけど」

「自分の欲望や願望が見せているものと、あるがままの姿とを区別するのは難しい。わたしたちは

どうしても、見たいものだけを見、読みたいものだけを読みとろうとしてしまう」

ホノリア・キランが静かに云った。

「でも見たいものを見ている人生は、それはそれで幸せなんじゃないかと思うこともある……それとは逆に、みんな幻想をいだいているけれど、自分だけはほんとうの姿を知っているんだというのがなくさめになる人生も……」

ホノリア・キランは目を伏せた。みんななんとなく考えこんでしまった。

「あなたたちも同性のパートナーでしょ……もうひとりの彼、シャイなのね、きつと」

またみんながそれぞれのグループに分かれて会話を始めると、アグネス・デュワーはセフィロスをつかまえて云った。

「わたしたちは（とデュワーは指で自分とキランを指さした）、パートナーだけど、お互いに異性愛者なの。恋愛と結婚生活は別だ、と考えているわけ。愛する相手と生活までもにしたいなんて、わたしは思わない。どうせ熱なんてすぐに冷めてしまうものだから。どうしてもホノリアがわたしの落ちつかなくて散らかった人生に現れてきてくれたのか、わたしにはわからないけど、だって彼女がいてくれなかったら、わたしきつと今日だってとてもアイシクルロジにたどりつけなかったでしょうよ……それであちこちの知りあいに電話をかけまくっていたでしょうね……旅券をなくしたの、集合時刻をメモした紙をどこかへやったの……」

「この人、これで推理小説を書いているというんだから、わからないでしょう……どうしてその理路整然としたところを、実生活には少しも応用できないのかって、わたしは云うんですよ……」

ホノリア・キランは苦笑を浮かべて云った。

「頭のなかの理路整然と、生活の理路整然は、ぜんぜん別のものなの。なぜみんなそのことがわかわらないのか、わたしにはそっちのほうがわからない」

アグネス・デュワーは、云っても無駄だろうけれど、とでも云いたげな口調でそう放つと、ワインを喉へ流しこんだ。

会話のあいだじゅう、若いスーラ・ビョルンズドットテイルは話に加わりたそうにみんなを眺めていたが、どうしてもそのタイミングがつかめず、勇気が出ないで、途中で部屋へ戻ってしまった。その寂しそうな姿が、なぜ特別セフィロスの印象に残ったのか？ そのことについて、彼はクラウドに話さねばならないような気がした。

「ここにもまた極度に人見知りな、悩める一人の若者がいるというわけだ」

セフィロスは部屋に戻ってから、クラウドにそう切りだした。クラウドはまだ起きていて、ベッドの上でトランプを広げ、自分を相手に賭けに挑んでいた。クラウドいわく、賭け事で生きていくためには、こうした「訓練」が欠かせないのである。

「あの女の子？」

クラウドはトランプから目を離さずに云った。セフィロスはクラウドのベッドに腰を下ろしてうなずいた。

「おれはなんだかおまえのことを考えてしまった。十五歳のクラウド・ストライフのことを。十五歳のクラウド・ストライフの場合、彼の人見知りは極度の警戒心に近かったが、あの女性の場合は

極度のおびえに近い。どちらとも安全な空間などこの世に存在しないと信じているところは同じだが」

クラウドはまだカードから目を離さないで、微笑んだ。

「だってないだろ、そんなもの、実際さ」

「そうだが、多くの人間は疑似的にそれがあることを信じている。虚構としての安全というか。それだって、ほんとうは絶えずおびやかされているのだが」

「だから、能天気善意とか安心とか信じてるやつがおかしいんだよ、おれに云わせりゃね。そんなの、ぶつかっただけで儲けもんだと思わなきゃ」

クラウドは手持ちのカードを放り投げた。賭けに負けたのだ。

「あのスーラ・ビヨルンズドットテイルにしてみれば、同年代に見えるおまえが頼みの綱ということになりそうなんだが、その肝心のおまえはいなくなってしまうし、あれはなかなかやりきれなかつたろうな。といって、いまのところ、こちらから話しかけるほど世話を焼くような気にもなれないというところがまた悲しいところで」

セフィロスは考えこんで云った。

「あんた」

クラウドはセフィロスの顔をのぞきこんだ。その目はなにか面白いものを見たというようにきらめいていた。

「なんでそんなにその子のこと気にしてんの」

「十五歳のクラウド・ストライフを思いだしてしまって、郷愁に駆られているんだ」

セフィロスはクラウドに思いきりもたれかかった。クラウドは重い髪の毛がからまるのと文句を云った。ふたりはしまいに、ベッドに折りかさなって倒れこんだ。

「十五のおれなんて、もう覚えてないよ」

クラウドはベッドに流れるセフィロスの髪をなでながら云った。

「どんだった？ おれ」

「近づいてくる人間には誰であれ噛みつきそうな顔をしていた」

セフィロスはクラウドの鼻筋を指先でなでてやった。そうすると、十五のクラウドは五秒とたたないうちに寝てしまったものだ。

「野生の獣の子どもが、毛を逆立てて必死に身を守ろうとしているような。その子はなにも信頼していなかった。なにも、誰も。彼は他人からの信頼を求めなかった。他人からはなにも求めなかった。与えるだけで彼は満足していた……自分がなにがしか与えられる者であること。そうあろうとすること。人を多く愛するゆえに傷つくのはこういう人間だ。自分がなにかしたことの見返りを求めるような真似をするには、こういう人間は高潔に過ぎる。それでいつも犠牲ばかりを強いられる。この高貴な人種は、ものごころついたときにはもう、世の中には得ようとするばかりで、与えようとしなない人間が大多数なのに気がついてしまう。そしてますます他人になにも求めなくなる」

クラウドは目を閉じかけていた。セフィロスはその鼻筋から指を離し、頬を、まぶたを、美しいひと筋の流れをつくっている眉をなでた。

「このタイプの人間が、うちにこもって身を守ろうとするなら、あのスーラ・ビヨルンズドッティ

ルのような人間になる。むき出しの攻撃性をあらわにすれば、クラウド・ストライフのように」

クラウドはちよつと微笑んだ。その皮肉げな笑みのなかには、たしかにはるか昔の、セフィロスはがはじめて出会ったころのクラウド・ストライフがいた。

「とはいえおまえはかなり極端なほうの例で、たいていの人間はもう少し穏当なところにとまるが。あの女性はどうなるだろう。世界のどこかに彼女にふさわしい人間がいて、その生命そのものように深い愛を受けとめるだろうか。あるいは彼女の愛は形而上的な、人類や神や星への愛というような次元へ向かうだろうか。それもいいだろう。いずれにしても、人のいまだく印象というのは裏腹に、ああいうのがこの世でもっとも情熱的な人種なんだ……あのおびえたような暗い顔の下に、世界を丸ごと飲みこめる熱情がひそんでいる。押しとどめておくのは容易ではないはずだ。おまえのように……」

クラウドはもう目を閉じていた。唇にかすかに満足げな微笑を浮かべて、クラウドは静かに息をしていた。

「昔おまえは月を飲みこんだ。あの冷涼な、冷え冷えと存在の輪郭をきわだたせるようなニブルの山で。それでも足りなかったので、太陽も飲みこんでしまった。それで世界は暗闇になったが、おまえの血が流れたとき、そこから最初の光が差した。赤くほの暗い曙光が。暗い山並みの向こうから、ひそやかに……そのとき世界が生まれたのだが……赤黒く、どろどろした、混沌とした世界が。制することも、押しとどめることも、それについてなにか理屈をめぐらすこともできない世界……」

クラウドは寝息を立てていた。小さいころ、母さんが寝る前にいつもお話をしてくれていたため

に、彼はいまだにお話とともに眠りにつくのが好きなのだ。彼の魂はいまあの温かく暗い寢床に落ちて、安らいだ。世界は眠りについた。セフィロスは彼の眠りを見守った。それから自分も眠りについた。

一日目

翌日から、いよいよ八日間におよぶ巡礼の旅がはじまった。初日はアイシクルロッジを出て、大氷河へ向かう斜面をひたすら降りる。ジェノバ戦役からこっち、星はゆるやかな温暖化に向かっており、このあたりも以前ほどの極寒地帯ではなくなったが、それでも一月や二月には、気温はマイナス二十度を下回り、雪原では猛烈な吹雪も発生する。道や宿場が整備されたとはいえ、決して安全な旅とも、快適な旅ともいえなかった。

「ここからは、七か所の宿場に宿泊しながらガイアの絶壁のふもとにある巡礼村へ向かいます」宿のミーティングルームで、トーベ教授が一行に旅程を改めて説明する。夫のトーベ氏が、地図を配ってまわる。案内役を務める夫婦の顔は引きしまっており、参加者たちも自然緊張した面持ちで聞くことになる。

「皆さん地図をご覧ください……ここから巡礼村までは、地図のように、道にそって休憩小屋や宿場が設けられています。一日の行程は、あまり雪道になれていない人でも、ある程度の余裕をもってこなせる距離になるよう配慮されていますが、とはいえ油断は禁物です。もし日暮れまでに宿場へたどり着けなければ、最悪チョコボ車を手配するという手もあるのですが、皆さん徒歩での巡礼をご希望ですから、できればそれは避けたいでしょう？ 初日の今日は、ひたすら下りの一本道で大氷河まで歩きます。そして大氷河の手前にあるロッジで宿泊になります。今日はそれほど困難な道ではありませんから、寒さや雪道になじんでください。歩いていて暑くなってきたら、汗をかく前に服を脱いで熱を逃がしてください。汗冷えは危険ですから……」

教授はほかにもさまざま雪道の注意点を挙げ、一同は生徒のように聞いた。それから帽子や手袋や冬靴やさまざまな装備を身につけて、自分の荷物を背負い、トレッキングポールを手に、巡礼に出発した。クラウドは荷物持ちなので、万が一のときのテントや毛布や医療品や、いろんなものをついでいた。彼の顔は、おのれの肉体という資本をもちいた労働への誇りに満ちていた。なんのかんのと云いながら、自分の体で金を稼いだのが好きだったのだ。これは彼がザックスから学んだことだ。曰く、男は自分の体でもって稼ぐことができはじめて男と云える。男の人生にはこの三つの形態しか存在してはいけない……子ども、男、老人である。

出発前に、スーラ・ビョルンスドットテイルが聖セーファのアイコンをとりだして祈っていた。その姿はなぜかひどく彼女に似合っていた。もう千年も前に生まれていたら、彼女は修道女か巫女になったろう。そしてあらゆる人間関係から切り離されて、神との神秘的交流のなかで生を送ったろう。

だがそんな時代ではなくなってしまう、彼女のような人間には、自分の進むべき道を見つけるのはたいへん困難なことに違いない。

一行は元気に真っ白な景色の中へ出ていった。空は曇っていたが、雪は降っておらず、風があまりないので、体への負担は少ない。彼らのほかにも、巡礼に出かけるグループがいくつもあった。それぞれのグループは互いにあいさつし、励ましあい、散らばっていった。巡礼者たちの顔は一樣に引きしまっていたが、期待に輝いてもいた。

クラウド・ストライフは、この斜面をちんたら歩いて降りるとは思わなかったとぶつぶつ云った。

「この道、昔はもつと勾配が急でさ、こう、シャーって滑り降りるのに具合がよかったんだ。おれ滑り降りるのって好き。でもこんな整備された坂道じゃ、ワックス塗った板切れあっても滑らないかもしれないな」

クラウドの話では、彼が四百年前はじめてこの斜面をくだったときには、道と呼べるものはなにもなく、天然の危険なゲレンデがあるばかりだった。いまでは、チョコボ車が通れるような幅広い道ができてしまい、危険で挑発的なゲレンデは消えてしまった。

「歩くのが巡礼の基本だからな」

セフィロスは、彼のペースとしては相当にのんびり歩きながら、グループやらカップルやらに分かれて先を歩いていく人々を見つめた。

「自分の体で経験しなければなんとなくうそだというのは、何百年経っても信じられているものらし」

「これ、訊こうかどうしようか迷ってたんだけど」

クラウドはセフィロスを見上げて云った。

「あんたが記念式典に出たいってのはわかる気がする。わかんないけどまだわかる気がする。でも、なんで巡礼ツアーまで参加しなきゃならない？ 好奇心？」

「それも理由のひとつだ」

セフィロスは唇に人差し指をあてて考えこむような顔をした。

「いったいおれの客体は、どこまで行くのだろうと思って。まあ聖人になったところでいよいよ行きつくところまで行ったという気はするんだが……それに」

セフィロスはクラウドを見て微笑んだ。

「おまえのたどった道を歩いたことはなかったなと思って」

「それ、四百年越しに思う？ 普通」

クラウドはあきれたような顔になった。

「おれはのんきで執念深いんだ」

セフィロスは楽しそうに云った。

「われながらあきれた組み合わせだと思う」

「ほんとな」

クラウドは吐き捨てるように云ったが、ふと思いなおしたような顔をし、
「でも、あんたそういうやつだった、昔から」

と云った。それからなにか自分が恥ずかしいことを云ってしまったような気がしたのか、足を速めて、ずんずん先へ行ってしまった。

その日は穏やかな天気が続いたので、一行は軽い肩ならしのような気分のまま、休憩小屋を中継しながら、午後三時過ぎには、大氷河の手前に設置された宿場に到着した。巡礼専用の宿場には、小ぢんまりしたロッジがぼつぼつ並んでいて、雪に包まれた大自然の中で、互いに身を寄せあっているように見える。

宿は大部屋で、ベッドがずらりと並んでおり、クラウドは病院みたいだと云った。部屋の中央で、薪ストーブが赤々と燃えていた。

「このあたりが万年雪に覆われていたころは、燃料の確保は死活問題だったようですね。植林もできないうし、地面を掘りかえして石炭や石油を探すのも容易でない。そういう意味で魔晄というのは、まったく夢の燃料だったでしょう。星の命を縮めるといふ側面を考慮しなければ」

トーベ氏が薪ストーブの炎を見つめながら云った。一同はベッドに転がったり、荷物を背負ってきかた肩をさすったりしながら聞いた。

「このあたりで夏に雪が溶けるようになったのは、ここ二百年ほどのことにすぎません。わたしはアイシクルエリア共同の植林プロジェクトに参加してるんですが、いまようやく二百年の努力が実ってきて、森が回復してきたというところでしょうか。こんなふうに薪ストーブが焚かれたり、暖炉が燃えたりするのを見てるとつい、なんだか感慨深い気持ちになってしまふんですよ……」

みんななんとなく薪ストーブを見つめた。薪を燃やしながら誇らしげに踊る炎に、ひとつの偉大

な生命が宿っているようにも見える。

「研究者として、アイシクルエリアの植林プロジェクトのことは、非常に興味をもって注視してきました」

マーガレット夫人が話しはじめた。

「アイシクルエリアだけではなくて、わたしたちの星そのものが、いまだ回復の途上にあるといえるでしょうね。たとえば、夫の家はもう十代ものあいだワインづくりにかかわってますが、創業者のころからの栽培記録が全部残っているんです。それによると、創業者がぶどうの栽培をはじめたころ、それはあのメテオから間もないころでしたが、とにかく挫折の連続で、なにをしてもまともなぶどうが育たなかったようです。というより、ぶどうは育つには育つのですが、とてもワインにできるようなものではなかったと。当時は慢性的な食糧難で、土壌が変質してしまっていたので、いまではとても考えられないような調理法で野菜を食べたりしていたようです。それが、代が進むうちにしだいに土地が回復してきて、生態系が回復してきたのがわかるんです」

彼女はいろんな専門用語を用いて事例を並べたが、その話は研究結果の羅列といった感じで、ちょっと退屈だった。人に聞かせるためというより、自分の頭の中にある知識を披露しているといった話し方だ。話をする夫人の態度は誇らしげで、自信にあふれているように見えたが、なんとなく空回りしているような感じもした。ひとりが話し、ほかの人は相槌を打つだけという会話に、一同はかなり退屈してきた。やがてこれ以上みんなを退屈させてはと思ったのか、ヨルム氏がおどけたように肩をすくめて、

「まあ、彼女がうちの農業記録を調べに来たところから、われわれの関係ははじまってるんですけどね」

と云った。

「歴史のある家なんて、たいした価値もなさそうに思えるんですが、そういう得をすることもあるんですねえ」

「どんなものでも、ダメになるのは一瞬のことなのに、それをつくったり、元どおりにしようとなったら、やたらと手間がかかるもんなのよね」

アグネス・デュワーが云った。

「星や自然に比べたら小さなことだけど、何か月もかかって考えた小説のプロットを間違えて捨てちゃったときのことを思い出すわ……」

「何十年もかけて書いた原稿を、メイドに捨てられてしまった歴史家もいましたね」

画家のフォドル氏が考えこむような顔で云った。

「これぞわが生涯の仕事と呼べるようなものだったはずですよ。それを、若いメイドの勘違いで、みんな焼却されてしまった」

「その人はどうしたんですか？」

スーラが質問した。衝動的に質問を口に出してしまったといったふうで、彼女はすぐに自分の発言にはっとし、顔を赤らめた。

「また書いたんだよ」

フォドル氏はスーラをまっすぐに見つめて云った。

「もう五十代かそこらで、当時の平均寿命からいけば人生の最晩年だったと思うがね。また書いたんだ……いちから……そして死の間際に間に合って、発表することができた。いまでも本屋に行けばその本が買えるよ。その話を知ったときわたしは思ったんだ……こいつはどえらいことだとね……そして自問した。自分が生涯をかけて描いた作品が燃やされても、わたしはへこたれずにまた一から描けるだろうか……失われたものをいつまでも惜しみ、嘆き悔やむのではなく……」

スーラ・ビョルンズドットテイルはひどく考えこむ顔になり、話題は別のことへ移っていった。

一同は宿の素朴だが味わい深い夕食を、満足して食べた。そうして心地よい疲れの中、なんとなく充実した思いで眠った。

『北の果てへの巡礼 サンプル版』
マスダ | Bliss
二〇二二年六月五日発行
本ファイルの内容、テキストなどの
無断転載・再配布を固く禁じます。

Bliss
<https://mors-et-benefica.com/bliss/>
info@mors-et-benefica.com